

中国社会福祉研究専門委員会 2021 年次総会での自由研究発表報告

国際医療福祉大学
渡辺 修宏

衷心感謝那些學習社會福利的人

新型コロナウイルス蔓延による影響は、2021年度の「中国社会福祉研究専門委員会年次総会」に2年連続のオンライン開催を強いただけにとどまらず、開催日延期をももたらしました。当初、10月開催の予定でしたが、直前になって11月に延期が決定し、そして最終的には、12月12日(日)実施となったのです。

オンラインとはいえ、国内ではない学会発表になると、経験乏しい私は、大変に緊張致します。まして、やむを得ない事由とはいえ、直前延期・日程調整中が続いたわけですから、そのおよそ2か月間は、「学会はいつになるのだろう?…本当にできるのだろうか?」という不安がとめどなくあふれる日々となりました。

そのような不安だか怖さに満ちた心持ちに浸ると、逆に、有難さにも気づかされます。

新型コロナウイルス感染でご苦勞されている方々は世界中にいらっしゃいます。ご自身の感染によって社会参加がままならなくなるのみならず、生死の境を奮闘される方もいれば、ご家族・知人友人・同僚らの感染によって、後方支援や、お仕事の肩代わりや、その他、ありとあらゆるさまざまなかたちで影響を受けている方々が数えきれないほどいるわけです。それを思えば、単なる「学会開催延期」という影響など、実に微々たるものです。むしろ、有難いのです。何はともあれ、参加させていただける、発表させて頂けるということが。

さて、今般、私が発表させて頂いた研究タイトルは、「不同宗教団体之间政党支持的协助流程 Social support process between different religious communities」でした。フィリピンでのフィールドワークに基づいたコミュニティワークについての発表でしたが、調査当時、台風の直撃や、現地自治体職員の暗殺事件発生の影響もあって、当初の研究目的を達成できず終わった、いわば「中途半端な研究」でした。

ですが、今般の発表に際して、現地(上海)の研究者・スタッフの皆さまは、研究の不十分さに(あえて)着目することなく、むしろ、この調査目的や意義について熱心に確認して下さいました。すなわち「できなかったことは何か?」ではなく、「できたこと、しようとしていたことは何か?」にフォーカスして、そこから生まれる学び・意義を強調して下さったのです。そのような彼らの姿勢に、実に、そして大変に、励まされました。大会参加者の熱心で、謙虚で、思いやり深い態度に、感激致しました。紙面をお借りして、今般の大会準備にかかわった方々、ご登壇・ご発表して下さった皆さまに感謝を申し上げます。そして最後になりますが、様々なお手配、調整等にご尽力して下さった日本社会福祉学会の高宗さんはじめ、事務局の皆さまに心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

